

職人さん。

いの町のまちで会い、まじった

第8話

2021.2月号

この街が育ててくれる、つながりの場所。

株式会社コクバン 田村 瑞子^{たむら かねこ}さん
 コクバンカフェオーナー 井上 美佐子^{いのうえ みさこ}さん



プロフィール：株式会社コクバンの田村瑞子さんは岡山県出身。コクバンカフェオーナーの井上美佐子さんは東京都出身。ともに高知県出身の夫と結婚後、いの町へUターン。2019年10月、田村樹志雄さんが代表となって株式会社コクバン内にテナントとしてコクバンカフェが誕生。

いの商店街を西の端から歩いていくと、ほどなく見つかるコクバンカフェ。倉庫のような建物と親しみのあるお洒落感に惹かれて店内へ。迎えてくれるのは、井上美佐子さんと田村瑞子さん。2019年の10月にオープンして1年余り、レンタルオフィスや街づくりも行う多機能な株式会社・コクバンにとって、開かれた交流港のような場所です。

この建物が淡くヴィンテージ感のある緑色に塗られているのは理由があります。三代続いた中山黒板教具店の工場があった場所。日本で初めて緑色の塗装による黒板を製作した会社からコクバンが受け継いだのは、仕事にかける職人の思い。そして街への思い。株式会社コクバンを経営する田村樹志雄さんは企業をサポートする経営コンサルタントでもあり、いの町の出身。大学から県外へ出ていましたが、会社を辞めて大学院へ入り、MBAを取得。家族とUターンし、いの町の郊外から中心商店街へ移り住んだ人でもあります。もっとも、祖父の代には商店街の近くに住まいがありました。



カフェは奥のレンタルオフィスと、天井の高い空間でひと続きになっています。

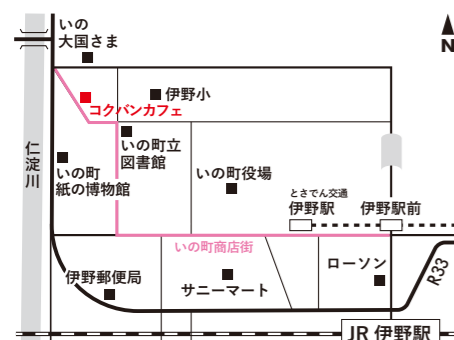
家主でもある中山絹子さんが愛情を注ぐ、おすす分けのバラ。今朝の品種は、グラハム・トーマスというイングリッシュ・ローズ。



地元食材を中心に提供しています。人気の一品、ルーロー井。お弁当のテイクアウトあり。

妻の瑞子さんは、夫の思いに共感し、新しい仕事を支えています。東京出身で、夫の転勤によっていの町へ来た井上さんとの出会いは、PTA活動でした。料理好きな井上さんとの出会いが、コクバンカフェの原点。「出会いに感謝しています。コクバンカフェの井上さんの応援団、夫の応援団、シェアオフィスで働く人の応援団になれたら。子どもも成長してきたので、地域やコクバンのお役に立てる人になれるよう、日々を暮らしたいです」と話す瑞子さんですが、知り合いのいなかった移住当初は、「もう友達はいないかもしれない。それでもいいんじゃないか」と思ったほどでした。

その心細さは井上さんも同じ。ところが、井上さんの口から思いがけず、「夫がマルイチなので」という言葉が聞けて、「紙のまち・いの」に昔から住んでいる人のようにだと思われました。マルイチとは明治時代に誕生した大きな和紙メーカーの通称で、現在もいの町に高知工場があります。いの商店街や大園さまのお祭りにぎわいには、製紙業で栄えた街ならではの歴史



コクバンカフェ
 いの町 3175
 営業 / 9:00 ~ 16:00
 (テイクアウトあり)
 定休日 / 日曜
 TEL / 090-3688-3727



があるのです。田村家の祖父もまた、マルイチの人でした。コクバンでは、大園さまの秋大祭とKami祭の開催に合わせ、マルシェや昔の写真・地図の展示をするなど、コクバンらしい交流を深めています。

結婚前は美容師をしていた井上さん。結婚して高知へ来て、子育ても始まって、料理店で勤めたことはありましたが、自身がカフェオーナーとなった昨年の起業・開店は、人生の転機となりました。「〇〇のおばちゃんがお辛うっぱい持ってきてくれたよ」「このバラは中山さんのお庭からね」というように、地域の人たちの寄り添ったコクバンカフェ。「隣近所の歴史あるお店とも仲良くしていただいています。私たちのような移住してきた人の思いと商店街の先輩たちの思いが、一緒になって進んでいけたらなあ」と、おこがましいですけど心から願っています。「女性の強さと優しさを感じる取材でした。」